



神崎トウコ

武藤ハヤ



群青に染まる夜空を見上げて、どれくらいの時間が経っただろうか。

嘗ては見えていたであろう東京の天高くに今は星の姿も遠く、くすんだそれを仰ぐ度にどこか息苦しくて筆舌に尽くし難い虚しさばかりが溢れて止まない。

いつしか人は窮屈な世界に閉じ込められてしまったものだ、と神崎トウコは息を吐いて下弦の月へと右手を翳しては、これを虚しく握ってみた。

恐らく完成の目途も立っていないのか、中途半端に建てられたきり音沙汰もなく鉄骨を剥き出しとするビルディングの地上数十階から今度は視線を下に向けると、見渡す限りの灯りが点在し、人の営みも確かにそこに存在する。

繰り返される毎日。誰もが昨日を見送り、今日を過ごし、明日を迎える。当たり前にも近いそんな日常も、しかし平穏と呼ぶには程遠く、こうして立ち尽くしている陰で蔓延る物騒がまた繰り返されているということも、察しに疎いトウコではない。

そして彼女はどちらかというとその物騒を起こす側でもある——ハザード・ユーザーと呼ばれる、人々からすれば厄介者でしかない曰く付きの一人でもあった。

ハザード。直訳すると、危険といった意味となる、その使い手。基本的な身体能力やら外見上の特徴に差異はない

が、彼らが疎まれる要因の一つには突発的に目覚めてしまう、とある異能力が由縁となっていると今でこそ周知の事実なのだが。

例えばトウコが持つ異能ことハザードファクターとは、銃弾を司る感覚強化型のもので銃器を媒介に撃ち出す弾丸や、逆に自らに向かつて襲い来るそれらの軌道を知覚する力は明らかに用途こそ限られているが、使いようによってはシンプルで都合が良い。

おかげで食いつ持に困ることなく済んでいるも、言い換えるならそういういったことにしか使い道がない、トウコをアウトローに引き込んでいる一因なのだから始末に負えないのも恐らくは的を射た認識として違いはない。

だが、この力を手放すことを惜しく思っているのもまた然り。それはトウコだけでなくハザードファクターを持つ者ならば誰もが呑み込まれるだけの魅力がそこにある。

だからこそ、ハザード・ユーザーは脅威なのだ。振るう力が大きければ大きくなるほど自制の難しくなる呪いにも似た異能を、掌握することの出来る人間などどうもない。

意図的に使用を禁ずる？ それが叶うのならばトウコはもちろん、世の異能使いたちはもつと穏やかに健やかに、慎ましく生きていられたかも知れない。

出来ないから困っている。望もうと望ままいと芽生えて

しまった力は本能に訴えかけて次第に使い手の心を蝕み、小さな種子を大きな厄災に昇華させようとするのだから。

上手く付き合う方法なんてのは詭弁だ。絶大なる異能に魅入られてしまった少女たちが同じく宿している衝動は易々と抑え込めない。

だからこそ、トウコも銃を商売道具にしている。何も殺しを生業とせずとも生きるには幾らでも方法があったのだとしても、そこに彼女なりの複雑も相俟つてのことだった。ふと、足元に下ろしたバッグの中で携帯電話が鳴動しているのに気付く。こんな時間に誰がどんな用で——と考えた辺りで、しかし少女は思考を止めた。

危なっかしい足場を離れ、壁際へと歩いて取り出す端末。液晶に表示されているのは、鬱陶しくも見慣れてしまった男の名であり、トウコは怪訝に眉をしかめていた。

どうせ碌でもない用件だ。このまま無視するか、出たふりをして嫌がらせに通話を切るやり口もあるのだが、浮かぶ対処に悩んでいると無人のはずの階層に声が響く。

「やあやあ、随分と冷たいじゃないの。愛人からの電話にも出てくれないなんて、ね」

いつの間に、と振り向く少女。けれど尋ねた声の主は僅かに遠く、どこか上機嫌っぽくトウコにとっては耳障りな声色で続ける。

「こんばんは、トウコちゃん。こんな夜更けにひと気のない場所で女の子が一人だなんてお兄さんとしてはとても心配なシチュエーションだ。悪い大人に見つかっちゃうぞ？」

とてもそうは思えない軽薄な様子に左右で色の違う、トウコの双眸が向いた。

「例えば、トウコちゃんみたいな可愛い女の子。俺なら絶対に放っておくはずもない」

不愉快な舌なめずり。寒空の下だというのに解放的に羽織った朱色のアロハシャツと、その下から覗くのは痩せっぽちのくせに筋肉質な胸板。七分丈のカーゴパンツに安っぽい便所サンダルといったふざけたファッションで現れた男は、決して人が成し遂げられない芸当をさも当たり前のように、ビルディングの外側——つまりは踏み外せば真っ逆さまに落ちるはずの宙へと荒鷲の両翼を羽ばたかせながら、にやりと嗤ってみせる。

「……わたしが可愛いかはさておき、そのイカれた格好はどうにかならないの？」

「俺の一張羅をイカれた格好呼ばわりなんて、ちよつと口が悪すぎるんじゃないかな」

美的感覚の欠落。見ていただけで寒気をするファッションセンスは度し難い。

「犬童ユウスケという男がどうして女性にモテないのか、

分かった気がする」

「そいつは聞き捨てならん言葉だなあ。是非とも詳しく教えて欲しいもんだけど」

「生憎だけど、わたしの受講料は安くはないから」

減らず口の一瞬、トウコは懐から拳銃を抜く。忌々しい青年の、両翼を狙って。

「げっ……！」

彼の動揺に構わず発砲。ハザードファクターを使うまでもなく命中した銃弾はそのまま男を地面へと叩き落とすのみだが、まんまと落っこちるはずもない。

消失した荒鷲の翼。代わりに生えた大蛇の尻尾が咄嗟に鉄骨に巻き付き、難を逃れる。

「おいおいおいおい！ フツー、出会って間もない相手にそんなんぶつ放すか？」

「どうせ今みたくどうにでもなるんだから、構わないかなって……」

「つざげんな！ 危うく死ぬとこだったつーの！」

先刻までの呑気は何処へやら、フロアに降り立った青年こと犬童ユウスケはトウコへと詰め寄ると、がしがしと金髪を掻いて食って掛かるも少女は気にも留めず拳銃を収めては手中の端末の鳴動を着信拒否という形で止める。発信者は他でもない、この青年だった。「わたしはユウスケの

こと、割と本気で死んでもいい人間だっと思ってるよ」

「ひどすぎる。心が傷付くなんでもんじゃないぞ」

「だって貸したお金は返さないし、勝手につまらない仕事は持ってくるし。この前なんて自分がやらかしたヘマの尻拭いをわたしにやらせたじゃない。言っておくけどタダ働きは二度と御免だつて、ずっと言ってるよね？」

じろりと見るがユウスケは視線を逸らす。生やした尻尾は既に消えていた。

「情報屋が聞いて呆れる体たらく。ただの駄目男で、そのハザードファクターも使う度に女の子を抱かないと気が済まないってリスク付きの異常性欲者。本当に気持ち悪い」

「そこまで言わなくてもいいだろ？ 俺のハザード・ワイルドはそういう力なの！」

「知ってる」

ナイフを片手に殺気を剥く。尋常を超えるこれに思わずユウスケが後ずさった。

都内でも有数の情報屋、犬童ユウスケはトウコと同様にハザード・ユーズーだ。

身に宿す異能は動物を模した部位を肉体へと具現するもので、それになぞらえた青年の通り名はワイルドファンクという、安直で捻りのないネーミングである。

トウコとの関係は、言うなれば良きパートナー……とは

あくまでも本人の談に過ぎず、彼女のユウスケに対する態度が体現しているように、あまり好ましいものではない。

辛うじて擁護するならば、彼は情報屋らしくハザード・ユーズーの情報に精通している。

それ故に請け負った依頼に彼ら異能使いが絡んでいるか否か、事前に知る事の出来るトウコは対策を怠らず円滑に物事を進められるのだが。

如何せん、人としてのモラルに欠く点とハザード・ワールドを行使する度に襲う異常な性欲が目にする。これまで一度として身体を許したことはなく、今後も許すつもりはないがそれは即ち、トウコではない別の誰かが彼の餌食になっているということだ。

「……で、用件は何？ 遊び惚けてるユウスケと違って、わたしは忙しいんだけど」

「そりゃあもちろん、仕事だとも。ハザード・ユーズーたちが関与している気配はないし確実に大金が手に入るデカイ仕事だ。ただし、少しばかり物騒な臭いもするがね」

「例えば？」

目敏く食い付く少女にユウスケは呆れながらに言う。

「**同業者**だよ。ある一人の標的に対して、曰く何人ものヒットマンが既に動いている」

「たかが一人のターゲットに、どうしてそこまでの人手

が？」

疑惑を胸に問い質す少女。ユウスケから彼女の望む答えは返らない。

「それも込みで調べるのが今回の仕事ってわけ。おっと、依頼主についての情報だが今はうっかり口を滑らせないようにと言われているから、そこは承知してくれよ？」

「へえ。口の軽いユウスケにしては、しっかりしてるね」

「そんならいヤベー案件ってことだよ。ぶっちゃけ、大金が絡んでなければ俺もあんまり深入りしたくないくらい厄介沙汰だからな。引き受けるかどうかだつてトウコちゃんが首を縦に振らないつてんなら、適当なところで下りようと思ってる」

へらへらと嗤う男は、けれどトウコに負けず劣らず現金な性格だ。恐らく依頼主からも手付金で釣られていると見抜けないトウコではなく、今度は彼女が呆れていた。

「そういうのつて下りようとして口封じで殺されるまでがお約束じゃない」

「やめてくれよ、縁起でもない」

「そんな相手と手を組んでるからでしょ。つていうか、少し考えたら分かるのに」

項垂れる彼に冷徹に述べて、短絡的な思考を咎めるが手遅れだろう。見殺しにするのも一つの縁切りとしては名案

に思えるも、それでは夢見が悪く、トウコとて聞いてしまえば複数人の殺し屋が動員されていることに多少なりとも関心がないといえば、嘘になる。

「……それ、本当にお金になるの？ 赤字になるような仕事は嫌だよ」

念の為に問う。ここぞとばかりにご機嫌を取るべく、青年は即座に頷いた。

「なる、絶対になる。大丈夫だって、今度は俺も同行するから、な？」

「居ても居なくても変わらない。もしもの場合は、わたしが戦うしかないから」

辛辣に言うトナイフの切っ先を月光に煌めかせて、思い知らせるように言う。トウコの力添えはそれほど大きく、力量の差を見誤るほど男の目は節穴でもない。

「じゃあ」

「いいよ。受けてあげる。でも、分け前を誤魔化したら殺す。置き去りに逃げ出したり、裏切っても。その時は容赦なく引き金を引くよ」

ざろり。灰色と蒼の眼光は青年への釘差しとして働く。忠告ではなく、警告として。

「は、はは。強く肝に銘じておくことにするとも」

5 「お利口さん」

恐ろしい少女だと悪寒が奔る。可憐な容姿と人見知りがちな性格のくせに、どこまでも人を見透かしているようなその双眸が、愛らしくも忌々しい。

が、二人の目的は同じである。生きていくのに必要な金は、幾らあっても足りないからひたすら貪欲に、強欲に、掻き集めるが如く彼らは今日も働くのだ。

「よろしく頼むよ、トウコちゃん。それともこうして仕事を持ち掛ける場合は、いつもの仰々しい呼び名の方がしっくりくるのかな？」

「どっちでもいい。わたしにとって、そんなものはどうでもいいことだし」

「お堅いことで。まあ、だったらこつちも好きに呼ばせて貰うけど」

異能の代償に襲う肉欲すら凍てつく少女の殺気に青年は金髪を搔いて、そして。

「それじゃ、先ずは打ち合わせといこう。先にも言ったが今回は忙しくなるからな」

月下にて男はまた唾う。同行なんて口先だけ、その分け前の殆どをどう出し抜くべきか懲りもせず早々の悪巧みとしながら。彼は白々しくも言うのであった。

「久しぶりにがっぱり稼ごうじゃねえか、バレット・キス」

---

---

神崎トウコ

発行日 : 2019年8月25日

著者 : 武藤ハヤ

本文書の無断複製・無断複写を禁じます。

---

---